

「あと5センチが、遠すぎる。」

ヨルファミリア本部——夕方。レモンは大食堂のテーブルに
頬杖をつきながら、ぼんやり窓の外を眺めていた。

「はあ……暇だなあ」

今日は任務なし。訓練も午前中で終了。ヨルはまふいところ
かへ行ってしまい、ほかのメンバーも好き勝手に過ごしてい
る。そんな中——

「レモン」

「ひゃっ!？」

突然後ろから名前を呼ばれ、レモンの肩が跳ねた。振り返る。
そこにいたのは——トムカス。

「……そんな驚くか？」

「お、驚くでしょ！ 急に後ろから呼ばれたら！」



「悪い」

「別に……いいけど」

レモンは視線を逸らす。心臓がちょっとだけ速い。いや。ちょっとじゃない。

（なんで普通に名前呼ばれただけでこんなドキドキしてんの、私……）

トムカスがレモンの向かいに座る。

「暇なのか？」

「まあね」

「俺もだ」

「……………」

「……………」

会話終了。レモンがちらっとトムカスを見る。トムカスも同時にレモンを見る。目が合った。



「……っ」

二人同時に逸らす。

「……………」

「……………」

気まずい。でも嫌じゃない。むしろ——妙に心地いい。数秒後、トムカスが口を開いた。

「散歩でもするか？」

「え？」

「嫌ならいい」

「い、嫌って言ってないじゃん！」

思ったより大きな声が出た。トムカスが少し驚く。

「……じゃあ行くか」

「うん」

レモンは立ち上がる。そしてトムカスの横に並んだ。



本部の外。夕焼けの中を二人で歩く。戦闘の話も任務の話もしない。ただ歩くだけ。

「……………」

「……………」

なのにレモンは落ち着かない。理由は簡単だった。

(近い……！)

トムカスとの距離。約20センチ。歩くたびに腕が触れそうになる。あと少し。ほんの少しだけ近づけば——そのとき、トムカスの手の甲が、レモンの指に触れた。

「っ！？」

レモンが勢いよく手を引っ込める。

「悪い」

「ち、違う！」



「？」

「別に嫌だったわけじゃ……」

言ってから気づく。

（私なに言ってんの！？）

顔が一気に熱くなる。トムカスも黙った。耳が少し赤い。

「……………」

「……………」

二人はまた歩き始める。今度はさっきより——少しだけ距離が近い。そしてまた、指先が触れる。今度はレモンも手を引かなかった。トムカスも離さない。けれど、手を繋ぐわけでもない。触れているだけ。

あと5センチ——いや、あと数センチ動かせばいいだけなのに、どちらも動けない。レモンが小さく呟く。

「……トムカス」



「ん？」

「なんでもない」

「なんだよ」

「なんでもないって！」

トムカスが少し笑う。

「変なやつ」

「はあ！？ トムカスに言われたくないんだけど！」

「俺のどこが変なんだ」

「そういうところ！」

言い合いながら歩く二人。けれど——指先だけは離れない。

本部へ戻ると、入口にヨルがいた。その横には当然のようにまふい。ヨルが二人を見る。



「おかえりー」

「ただいま」

レモンが答える。ヨルの視線が下へ移動した。二人の手。正確には――

あと少しで繋がりそうな距離にある二人の手。

ヨルの口元がニヤツとする。

「へえ〜？」

「な、なに！？」

「いやあ？」

ヨルは楽しそうだ。

「別にい？」

「その顔絶対なんか言いたいじゃん！」

まふいも二人を見る。

「手を繋げばよろしいのでは？」



「まふい！？」

あまりにも直球。トムカスまで固まった。

「……………」

「……………」

ヨルが笑う。

「まふい、それ本人たちが一番困ってるやつ」

「そうなのですか？」

「そうなの！」

レモンの顔は真っ赤だ。

「もう！ 私、部屋戻る！」

「レモン」

トムカスが呼び止める。

「なによ！」



トムカスは少し迷ってから言った。

「……また明日、散歩するか？」

レモンが固まる。数秒。

「……………する」

小さな声。

「聞こえない」

「するって言ったの！」

レモンはそのまま逃げるように廊下を走っていった。トムカスはその後ろ姿を見送る。ヨルが横から肘で軽くつつく。

「嬉しそうじゃん」

「……別に」

「耳真っ赤だけど？」

「うるさい」



その夜。レモンはベッドに寝転がっていた。枕に顔を埋める。

「……………」

今日のことを思い出す。夕焼け。隣を歩くトムカス。触れた指先。そして――

『また明日、散歩するか？』

「~~~~っ！」

レモンは枕を抱きしめたまま、ベッドの上で足をバタバタさせる。

「なんなのよ、もう……！」

一方その頃、トムカスの部屋。

「……………」

筋トレ中のトムカスが突然動きを止める。思い出したのは――レモンの、

『するって言ったの！』



という真っ赤な顔。

「……………」

無言で筋トレを再開。さっきより明らかにペースが速い。理由は本人にもよく分かっていない。まだ恋人じゃない。告白もしていない。手すら繋いでいない。だけど二人とも——

明日の散歩を、今日よりずっと楽しみにしていた。

あと5センチ。その距離が縮まる日は——たぶん、そう遠くない。

